

長岡城跡
（厚生会館地区）

長岡城跡(厚生会館地区)

ーシティホール（仮称）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

2010 新潟県長岡市教育委員会

2010

新潟県長岡市教育委員会

長岡城跡(厚生会館地区)

ーシティホール（仮称）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一

2010

新潟県長岡市教育委員会

例　言

1. 本書は、長岡市大手通 1 丁目ほか地内に所在する長岡城跡（厚生会館地区）の発掘調査報告書である。
2. 調査原因は長岡市による厚生会館地区整備事業であり、調査主体は長岡市教育委員会である。
3. 調査期間　　現地調査　平成 21 年 1 月 19 日～平成 21 年 10 月 16 日
出土品整理　平成 21 年 10 月 19 日～平成 22 年 2 月 26 日
4. 調査は、長岡市教育委員会の指導・管理の下で株式会社 太陽測地社（以下、太陽測地社）が実施した。
5. 発掘調査は、太陽測地社 中山大輔・佐藤優子・北野薫が担当した。
6. 地形測量は、太陽測地社 嵩野泰次郎・砂川昌徳が担当した。
7. 出土品整理作業は長岡市教育委員会の業務委託を受けて、太陽測地社 佐藤・北野・中山が担当した。
8. 出土遺物の注記は「NOJ - CH」とし、ほかにグリッド名・層位・構造名・取り上げ日等を記載した。
9. 航空写真測量については、株式会社 長測に依頼し、バルーン使用の空中撮影を行った。
10. 自然科学的調査は、樹種判定をパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼し、その成果を本書に掲載した。
11. 遺物実測図と写真図版などの遺物は符合する。写真的縮尺は不同である。
12. 出土品及び原図・写真類は、長岡市教育委員会が保管している。
13. 報告書の刊行は長岡市教育委員会の業務委託を受けて、太陽測地社が行った。
14. 本書の執筆は、第 1・2 章を長岡市教育委員会 烏居美栄が、それ以外を佐藤・北野が分担し、編集は北野が行なった。
15. 報告書に関する版権は長岡市が所有し、これを行使する。
16. 調査及び報告書作成にあたり下記の諸氏・機関より御協力・御教示を賜った。記して謝意を表する。
(敬称略　五十音順)
相羽 重徳　青柳 孝司　安藤 正美　金子 拓男　河村 健史　駒形 敏朗
齊藤 優介　御嶽 貞義　宮永 一美　本山 幸一

発掘調査参加者

相澤 悟　青柳 隆規　植木 由美　金山祐太郎　川合 宏尚　木村 香
桑原 隆一　小林 正樹　近藤 英晃　白井 かおり　佐藤 武士　田沢 麻子
長谷川 巴　長谷川竜也　樋口 照子　三沢 香里　山田 雄介　吉田 希美
ほか、長岡市シルバー人材センターより 59 名

整理作業参加者

相澤 悟　植木 由美　木村 香　棚村 チイ　樋口 照子　三沢 香里
山田 雄介

凡　例

1. 本書における方位は磁北であり、水平基準は海拔高（m）である。
2. 公共座標は世界測地系を使用し、南北をX軸、東西をY軸とした。
3. 座標軸は、以下のとおりである。
2 A 5 6 8 (X=160522.795 Y=31110.278)、2 A 5 6 9 (X=160501.402 Y=31152.088)
4. 長岡城跡は、調査の便宜上1区・2区・3区・5区・6区・7-A区・7-B区・8区と設定した。
5. 遺構の全体図は原則として縮尺1/200で掲載している。
6. 土壌式名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』(2008年版)に準拠している。
7. 遺物の実測図は原則として、陶磁器は縮尺1/4、1/6、その他の遺物は縮尺1/2、1/3で掲載し、各図版にスケールを表記している。
8. 遺物観察表は、残は残存値、括弧は推定値を表記している。

目 次

例 言・凡 例

第1章 遺跡の位置と環境.....	1
第2章 調査の経緯	
第1節 調査に至る経緯.....	2
第2節 調査経過.....	2
第3章 調査の概要.....	3
第4章 遺構	
第1節 星敷地関連の遺構.....	4
第2節 城郭関連の遺構.....	4
第5章 遺物	
第1節 陶磁器.....	5
第2節 木製品・石製品・金属製品.....	6
第6章 自然科学分析(パリノ・サーヴェイ株式会社).....	7
第7章 総括.....	10
図 版	
報告書抄録	

図版目次

第1図 長岡城跡の位置および範囲図(S=1/10000)
第2図 遺跡位置図(S=1/50000)
第3図 調査区地区別原(S=1/2000)
第4図 位置原(S=1/20000)
第5図 調査区付近復元原(S=1/1200)
第6図 グリット位置図・全体平面図(S=1/400)
第7図 標準土柱状図(S=1/80)
第8図 5・7・A-E遺構配置図(S=1/200)
第9図 1・2・3区遺構配置図(S=1/200)
第10図 6・7・B-E遺構配置図(S=1/200)
第11図 8区遺構配置図(S=1/200)
第12図 墓(S=1/50+100)
第13図 井戸(1)・墓(S=1/50+100)
第14図 井戸(2)S=1/50)
第15図 井戸(3)(S=1/50)
第16図 土壙・柱穴(S=1/50+100)
第17図 陶磁器(S=1/4・1/6)
第18図 木製品・石製品・金属製品(S=1/2・1/3)

表目次

第1表 陶磁器類表
第2表 木製品類表
第3表 石製品類表
第4表 金属製品類表
第5表 鉄鉛板類表
第6表 銅精定鑑表
写真図版目次
写真1 遺跡・遺構 1・200E直上S=5, 3-B(E直上S=5)
写真2 遺跡・遺構 6(E直上S=5), 7-A(E直上S=5)
写真3 遺跡・遺構 7-B(E直上S=5), 8(E直上S=5)
写真4 遺跡・遺構 3-E, 4-E, 5-E, 6-E, 7-E, 8-E, 9-E, 10-E 6(E, 8-E)標印複出範囲(S=5×5), 6(E, 8-E)標印複出範囲(S=5×5)
写真5 陶磁器
写真6 陶磁器・木製品・石製品・金属製品

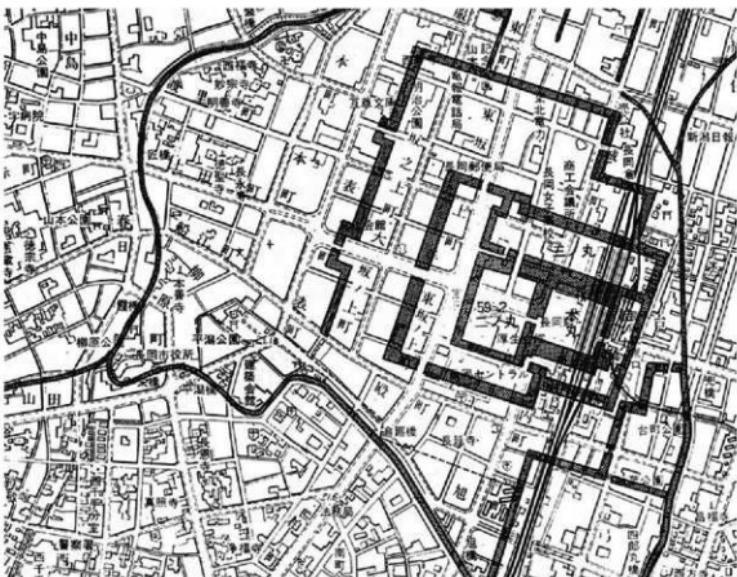
第1章 遺跡の位置と環境

長岡城跡は新潟県長岡市城内町1丁目ほかに所在する。長岡市域のほぼ中央を南から北へ流れる信濃川の両岸には沖積平野が広がる。平野の東側には魚沼丘陵から延びる東山丘陵、西側には東頸城丘陵から派生する西山丘陵や河岸段丘がそれぞれ南北に走る。長岡城跡は信濃川右岸の沖積平野内に立地し、全体的に平坦な地形である。周辺は市街地となっており、JR長岡駅付近に本丸があったとされる。

信濃川両岸の丘陵や河岸段丘上には中世の山城跡などが所在し、また、河岸段丘から沖積地にかけての地域でも中世の城館跡などが複数確認されている。右岸沖積地に所在する藏王堂城跡はその一つであり、長岡城の築城を始めた堀直寄が居城した城である。藏王堂城の周辺は中世以来、中越の政治・経済の中心地域であったが、信濃川に近く川欠などの水害が多いことから長岡城への移転が企図されたという。

長岡城と城下町は慶長10年（1605）頃から建設が始められ、元和4年（1618）に直寄が本庄（村上市）に移封となった後は、代わって長岡に入った牧野忠成が工事を引き継ぎ完成させた。城の東の柄吉川と西の信濃川を自然の外郭とし、柿川から水を引き込んで内部に複数の堀を巡らしていた。第1図は、現代の地図に堀跡・水路の位置を網掛けで記したものである。

長岡城は牧野家による長岡藩政の中心地として約250年間利用されたが、慶応4年（1868）の北越戊辰戦争によって城下町とともに焼失した。明治以降は商業の中心地となり、また、第二次世界大戦後の復興に伴って都市の近代化が進められ、現地表面では堀や土塁等の遺構を見ることはできない。（鳥居）



第1図 長岡城跡の位置及び網張図（S = 1 / 10000 「新潟県遺跡地図 昭和54年度版」から転載）

第2章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

平成18年3月、長岡市都市整備部まちなか活性課（当時）から長岡市教育委員会（以下「市教委」という。）に、長岡市中心市街地再開発事業に係る埋蔵文化財の取扱いについて協議の申し入れがあった。計画事業の一つに、長岡市厚生会館（以下「厚生会館」という。）の建替えと、厚生会館周囲の宝田公園と長岡セントラルパークの再整備を行う「厚生会館地区整備事業」があった。市街地は長岡城跡の範囲内であり、明治以降に開発行為が行われているが事業地の残存状況は不明確であること、事業によって遺跡に影響がある場合には発掘調査が必要となることなどを伝え、事業計画が具体化した段階で改めて協議を進めることとした。その後、市役所機能を含む「シティホール（仮称）」を厚生会館地区整備事業地に建設することになり、南北の二つの公園に挟まれた市道1号線の一部も含めた約15,000m²が事業地として決定した。

事業地は、二ノ丸や武家屋敷地があった地域にあたるが、行政発掘調査が行われるようになる前に開発されたため、遺跡の残存状況は不明であった。協議の結果、厚生会館など既設の建築物によって遺跡が残存する可能性が低い範囲は調査の対象外とし、本工事において遺跡が出土した場合には調査確認を行うこととした。平成20年7月の確認調査の結果、事業地の北部、二ノ丸の郭内に当たる宝田公園の大部分では遺跡が失われていると見られ、また、事業地の南部、武家屋敷地に当たる長岡セントラルパークでは良好ではないが遺跡が残存する可能性があると判断された。事業担当課である長岡市シティホール整備室と市教委との協議により、長岡セントラルパークの範囲と、堀跡が推定される宝田公園の一部などについて記録保存のための発掘調査を行うこととした。なお、事業地の北端、大手通りに面した公園部分と、市道1号線の部分については、施設の利用・解体の面から平成20年7月に確認調査ができなかつたが、発掘調査対象とする予定とした。施設解体に合わせた状況確認の結果、市道1号線部分は発掘調査を行うこととなつた。事業地北端の公園部分は搅乱のため遺跡残存の可能性が低く、発掘調査は不要と判断した。

第2節 調査経過

調査地は長岡の中心市街地であり、公園や厚生会館の供用期間やそれらの解体除却工事、既存樹木の移植工事などと調整し、また、調査終了後の埋戻しのために発掘残土の仮置きが必要であることなどから、調査地を分割して調査を進めることとなった（第3図参照）。当初、事業地北部に設定した1・2・3区から調査を開始する予定であったが、工程の調整の結果、南部に設定した6区から開始することとなった。

長岡セントラルパークの工作物の除却後、平成21年1月19日から現地測量、21日から重機による表土掘削を6区において開始した。搅乱の状況が当初見込みより激しく、また、表土内に近世や近代以降の陶磁器類なども混在したため掘削作業は困難であった。グリッド杭の打設作業を平行して行い、2月23日から発掘作業員を導入して遺構確認面の精查と搅乱除去、遺構発掘などの作業を順次進めた。6区の調査後は、7-A区、7-B区、8区と進めた。1・2区は堀跡が想定され、掘削が深いため鋼矢板を設置して調査を行った。1・2区と3区との間に存在した厚生会館の軸体除却後、市道1号線のアスファルト舗装や埋設物（ガス管など）の撤去が行われ、3区及び5区の調査を行った。3区についても鋼矢板設置を予定していたが、安全勾配での掘削とすることとした。10月5日の掘削作業終了後、発掘遺構などの埋戻しを行い、16日に現場事務所など撤収して現地での調査を終了した。なお、3区及び5区については、9月12日に一般市民向けの現地説明会を開催して公開した。

（鳥居）

第3章 調査の概要

グリッドの設定 発掘調査に使用したグリッドは基準点を基に設定した。グリッドの設定には世界測地系を使用した。基点となるAOの座標値は工事の基準点2点(2A568・2A569)を用いて、調査区内全域を網羅できるように基点を設定した。真北の基線を10m毎にグリッド杭を設定して南から北へ算用数字(1, 2, 3...)、西から東へアルファベット(A, B, C...)として両者を組み合わせて表記した。グリッドは基点から南北の範囲をひとつの区画として呼称している。

調査方法 発掘作業の手順として工事の整地土である表土から遺構確認面直上までを担当者立会いのもと重機により除去した。基本的な作業の流れは、表土・盛土除去→遺構確認面の精査→搅乱除去作業→遺構掘削→写真撮影→記録作業→測量→補足作業→井戸断ち割り→埋め戻しの順序である。I・II層は遺物を包含していた為、重機による掘削時に各層から出土した遺物の取り上げを行なった。調査により発生した残土は順次終了した調査区の埋め戻しおよび大型車両により建設事業地外に排出した。

堀部の調査は時間的制限があった為、表土除去から覆土の掘削までの工程を重機により作業を行なった。
基本層序 調査区内の土層堆積状況は、2つの堀を横断する南北方向に4箇所設定した。基本層序は4つに大別できる。近代搅乱・整地層であるI・II層は、褐色砂質土を呈する。近世整地層であるIII層は、暗褐色砂質土を呈する。堀覆土層は、植物遺体や木屑等の有機質を大量に含む。地山層であるIV～X層は、にぶい黄褐色粘質土層が全体に広がり、褐灰色粘質土が帯状に含む。遺物は皆無であった。III層の上面が今回の調査における遺構確認面である。

(北野)



第2図 遺跡位置図 (S=1/50000)



第3図 調査区地区割図 (S=1/2000)

第4章 遺構

本調査区は、『長岡城之図』(長岡市立中央図書館蔵)によると城南面の外・内堀及び家中屋敷（武家屋敷）にあたる。以下、城郭関連と武家屋敷関連に分けて遺構の概要を略述する。

第1節 屋敷地関連の遺構

柱穴 直径30cm前後の円形小土坑を柱穴と一括する。大別して木構・檜等柱列と掘立柱小規模建物の遺構と考えられるが、復元できたものは少ない。柱穴列は堀・道路際や屋敷内で確認される。柱穴列1は、内堀に沿って柱間が約1.8mの間隔で東西方向に一直線に延びる。柱穴列2は、柱穴の規模から檜と考えられる。建物跡と考えられるものは柱列が揃わいため柱穴群としておく。柱穴群3は、柱穴の並びから檜もしくは小規模な施設の可能性が考えられる。柱穴群4は、規模や井戸の配置等から建物と推測される。遺構177・179・162・257は柱穴底に礎石を据える。いずれも散在することから建物の角等要所に使用されたと考えられる。

土壙 特に調査区北半部に密集する。これらは土層堆積状況や出土遺物から廐棄土壙（ゴミ穴）とみられ、遺構同士の切り合いも多い。遺構10は覆土中間から下層に有機質を含み、漆椀、下駄、桶蓋や墨書き木製品が多数出土した。遺構25は東西軸に梢円形を呈する。覆土の上層に有機質を含み、炭化物と共に骨片を採取した。

井戸 確認された井戸の大半は円形結構側式井戸である。この他、上部が方形縦板式の井戸を2基、矧り貫き式井戸を1基確認した。円形結構側式井戸は、特に6区北側に密集する。遺構16・410は部分的に二重構造となるのは修補によるものであろうか。方形縦板式井戸は6区（遺構29）、7-B区（井戸B）で確認した。いずれも、下部に円形結構側式井戸を配する。遺構29は、遺構面より深さ約2.0m地点で枠上部が崩れた状態で検出した。井戸Bは縦板が抜き取られており、四隅の支柱のみ遺存する。矧り貫き式井戸（遺構110）は、7-A区の堀より南側中央部で検出された。桶部は2枚組で形成し、樹種はスギ材を用いる。いずれも遺構面より約4.0m下に堆積する黄橙色礫混じり層まで井戸枠が達しており、河川氾濫痕がみられた事から水脈があったと考えられる。井桁等の設備は検出されず、礫層の上に桶が据えられていた。

第2節 城郭関連の遺構

堀 1区・2区・3区で内堀、7-A区で外堀を確認した。いずれも断面形状は箱形で、堀壁面の傾斜はおよそ60~70度を測る。このうち、2区・3区・7-A区の堀底から土留めに用いたと考えられる杭列を確認した。2区の杭列は、堀南側から東西方向にはほぼ一直線に延びる。杭は長いもので159.1cm、直径65.3cmを測る。3区杭列は堀北側と堀肩から1.5m南方の地点で確認した。堀南側ではテラス状の平坦面がみられ、中央部で20~30cmの段差がつくが、搅乱層が直上まで及ぶ為、全容は明らかにできなかった。覆土下層から杭を倒れた状態で6本検出した。堀は2区に向かってなだらかな傾斜をみせる。7-A区杭列は堀両端から東西方向にはほぼ一直線に延びる。南東部の杭列では北西部の杭よりもやや粗悪な杭を用い、ほぼ垂直に杭を打ち込む。杭はもっとも長いもので189.3cm、直径108.99cmを測る。

道路 5区は東西方向の道路跡だが、搅乱も多く側溝・路面等全く確認できなかった。 (北野)

第5章 遺 物

第1節 陶磁器

遺物は食器類や壺・擂鉢等含め肥前陶磁器が圧倒的に多く、これを近郊産とおもわれる陶器類が補完する。瀬戸系磁器の端反碗や信楽系の小碗・灯明皿もみられるが概して少ない。また、在地の土師質土器では甕や七厘等があるが、土師質の灯明皿は確認されていない。時期的には17世紀～19世紀まで、大半は19世紀に属する。なお、近世面が多く擾乱され一括遺物は少ないが、主な遺物を産地毎に紹介する。

伊万里 瓢 (1) は、腰部からおおらかな立ち上がりをみせ、器壁は薄く高台疊付に砂粒が多く付着する。古い要素も感じるが大橋III期と考えておく。(2) は外面一重網目紋、見込にも紋様を描く。高台内の銘は崩れ字で判読不能である。皿(3・4) は見込蛇の目釉剥ぎとするが、(3) は高台無釉である。(5) は高台内に一重角福を描く。器壁は厚めで見込の図柄も古様なことから大橋III期と考える。(6) は白磁壺である。頸部は短く、口縁部は無釉とする。肩部は張りをみせる。

唐津 天目碗 (10) は鉄釉を掛け、高台脇に段を付けない唐津天目特有の形態である。(11) はいわゆる眞器手碗である。やや小振りで形式化された姿は17世紀後半以降の量産品である。皿(12) は見込に段を有し、胎土目が4箇所残る。大きく焼け歪む。溝縁皿(13) は、艶のない鉄釉を施す。見込に砂目が3箇所残る。高台内は削らず余切のままである。灯明受皿(9) は、簡形の皿台部は無釉とし、受皿部は灰釉を掛ける。底部系切り痕を残す。鉢(16) は、外に折返した口縁を有し、内・外面は白土横刷毛目紋、腰部には鉄釉を塗る。(15) はロクロ成形の擂鉢である。口縁下で稜を受け立ち上がり、断面「T」字形に口縁帯部をつくる。甕(14) は、鉄釉を掛け、体部内外面に格子目叩き紋を残す。外面に2条の縦状突帯と波状紋、貼花紋もみられる。また、焼成後「コ」字形を刻印する。

その他の陶磁器 瓶(7) は体部に大きく草花紋を描く。明るい青色を呈する西洋真珠を用いることから明治以降と考えられる。香炉(8) は、陶胎染付である。体部は外反し、煙返しが付き、蛇目高台である。胎土は粗く淡黄褐色を呈する。図柄の筆致は丁寧で上品に仕上がる。肥前産の可能性も考えられる。(17) は鉢である。見込に押印で鉢目を入れ、内面まで鉄釉を掛ける。(18・19) は焼締め灯明皿である。ロクロ成形し高台は持たない。(19) は見込「□二月日」・底面「□川」と墨書きされる。碗(21) は、体部内外面は灰釉を掛け、高台無釉である。高台内「曾所」と墨書きされる。

瓦質土器 (20) は鬼面鎧付を受けた火鉢である。外面形成形により凸帯3条を巡らせ、亀甲紋・城郭山水紋を陽刻する。幕末から明治頃であろうか。

(北野)

出典 番号	器種	產地	法度		時期	備考	出土 資料	法度		時期	備考	出土 資料	法度
			口径	底径				器形	地質				その他の 特徴
1 瓢	伊万里	11.5	4.5	8.4	17C中	6 土玉	金付(花瓶)	10 天目鏡	唐津	11.8	4.1	6.5	17C前
								染付(内一重網)		11.2	4.2	6.8	17C後
2 瓢	伊万里	(11.0)	4.6	6.1	17C後	7 裏内	見込	12 高脚手鏡	唐津	11.7	4.6	3.4	17C後
								染付(内一重網)		12.0	4.8	3.1	17C後
3 皿	伊万里	(11.2)	3.7	3.3	17C後	6 滾鐵23	染付(内一重網)	13 漆器	唐津	20.8	14.3	2.2	17C後
								刷毛目					漆器
4 瓢	伊万里	12.7	4.0	3.5	18C前	5 滾鐵5	染付(内一重網)	14 瓢	唐津	29.6	—	17C後	17C中
								刷毛目		—	17C後	6	撲
5 皿	伊万里	15.2	9.0	3.1	17C後	7 裏内	染付(内一重網) 絞、高台、角福	15 滾鉢	唐津	21.0	9.6	10.4	18C前
								刷毛目		—	18C前	2 土玉	
6 瓢	伊万里	10.8	8.5	3.5	17C後	5 滾鐵12	白磁	16 瓢	唐津	7.2	4.6	2.3	18C後
								染付(内一重網)		—	18C後	1 土玉	
7 瓢	伊万里	9.5	8.0	3.5	近代	1 壱吉	染付	17 瓢	唐津	11.6	—	1.5	18C
								染付(内一重網)		—	18C	1 土玉	
8 香炉		11.4	7.3	8.5	17C-18C	4 滾鉢	白磁	18 灯明皿	唐津	30.0	—	17.2	18C
								染付(内一重網)		—	18C	6 滾鉢10	瓦質・別成形模様
9 灯明受皿		(12.0)	5.1	6.0	17C	6 滾鉢	灰釉	19 瓢	唐津	—	3.1	1.8	18C
								染付(内一重網)		—	18C	3 土玉	
								染付(内一重網)		—	18C	1 土玉	

第1表 陶磁器観察表

第2節 木製品・石製品・金属製品

木 製 品 22・23は、荷付札である。22は表面に「漆山御藏 高橋半左衛門」、裏面に「漆山村 浅(清?)右衛門」と書かれる。天和2(1682)年、長岡藩は領内の村々を8組に編組し組ごとに御藏を設けた。この時に編組された漆山組は、貞享元(1684)年に北組に組み込まれ枝藏となる。なお、今回の報告書では掲載しなかつたが、「上組」、「上御藏」と書かれた荷付札が5点出土している。23は表面に「牧野飛騨守内九里孫左衛門」、裏面に「荷物七固之内」と書かれる。上部に2箇所穴があいている。牧野飛騨守は2代目藩主忠成(1655～1674)である。九里氏は長岡藩の家臣である。24は、墨書き木製品である。「萬延元年 武三右衛門 武作之丞」と書かれる。裏面に墨書きはない。武氏は長岡藩の家臣である。

石 製 品 25は硯縁を中心に線が刻まれた彫刻である。硯背は自然縁を粗成形のまま利用している。硯面には墨室と硯池の境はなく、墨を擦った痕跡が集中する箇所が見られ、墨痕も擦痕部分に目立つ。ただし、欠落部分に向かって、硯面が深くなるので硯池は欠損部分に存在した可能性もある。

金属製品 簪(26)は、長さ19.9cmを測る。頭部に耳搔きが付き、髪に差す部分が二股になっている。矢立(27)は、全長20.55cm、墨壺部分直径3.0cm、同高さ3.9cmを測る。筆筒部分は丸型、墨壺部分は杓型の真鍮製一体型矢立である。墨壺の裏側底部に「上」と文字が彫られている。墨壺内には、黒色の塊が入っている。墨汁をしみこませた真綿またはモグサなどが残存しているものと思われる。小柄(28・29)は銅製である。28は残存長9.9cm、柄部長さ8.4cm、同幅1.4cm、同厚さ0.4cmを測る。柄部には梅花紋を陽刻する。29は残存長17.5cm、柄部長さ9.8cm、同幅1.4cm、同厚さ0.5cmを測る。柄部には部分的に亀甲紋が打たれ、中央部には飾り金具が付いている。飾り金具は、破損により意匠不明である。錢貨は、取り上げ数27点で内訳は寛永通寶18枚・判読不能が9枚である。うち4点(30～33)を提示した。30・31は古寛永通寶で、無背である。2点とも寶字のウ冠が小さく、足がスになっている。30の寶字の王が下がり気味である。32・33は新寛永通寶で、背文に「文」がある。2点とも、通字の頭がコ、寶字の足がハになっている。32は穿内が鋤たままで仕上げが行われていない。また、寶字部分が鋤痕み、ウ冠の右側が欠損している。33は製作が良好である。4点とも対読である。
(佐藤)

調査番号	種別	木製	法量			形状	地区	出土遺物・層位	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)				
22	荷付札	漆目	11.8	3.6	0.62	漆山御藏 高橋半左衛門 漆山村 浅(清?)右衛門	6	遺構⑩	
23	荷付札	墨目	25.1	6.3	1.0	牧野飛騨守内 九里孫左衛門 漆山村 荷物七固之内	8	H7 遺伝	
24	木製	墨目	23.0	8.4	0.6	萬延元年 武三右衛門 武作之丞	8	遺構⑩ 遺傳	

第2表 木製品観察表

調査番号	種別	法量			地区	出土遺物・層位	備考	
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)				
25	硯	19.5	11.05	2.0	285.0	6	徒伝 墨跡(硯縁)/鏡剝	

第3表 石製品観察表

調査番号	種別	法量			地区	出土遺物・層位	備考
		全長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)			
26	硯	19.5			10.0	6	遺構⑩ 遺傳
27	墨壺	20.55	3.0	2.0	63.0	7	墨
28	小柄	9.9	8.4	0.6	22.0	6	遺構⑩ 埴内 銅柄・墨壺(鉛打し)跡
29	小柄	17.5	9.8	0.5	36.0	2	墨 下傳 銅柄・墨壺

第4表 金属製品観察表

調査番号	種別	青文 刻款	法量			地区	出土遺物・層位	備考
			外径(cm)	内径(cm)	厚さ(cm)			
30	寛永通寶	無背	10.36	7.45	2.0	0.6	0.12	4.0
31	寛永通寶	無背	10.36	2.43	2.0	0.55	0.12	3.0
32	寛永通寶	文	10.68	2.5	2.0	0.6	0.13	3.0
33	寛永通寶	文	10.68	2.54	2.0	0.6	0.13	3.0

第5表 錢貨観察表

第6章 自然科学分析

長岡城跡（厚生会館地区）7-A区出土杭材の樹種

バリノ・サーヴェイ株式会社

1. 試 料

試料は、長岡城跡（厚生会館地区）7-A区の発掘調査で検出された堀跡の土留めとして利用された芯持丸木の杭材5点（通しNaI～5）である。

2. 分析方法

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・粂目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

木材組織の名称や特徴については、島地・伊東（1982）、Wheeler他（1998）、Richter他（2006）を参考にする。また、日本産木材の組織配列については、林（1991）や伊東（1995, 1996, 1997, 1998, 1999）を参考にする。

3. 結 果

結果を表1に示す。杭材は、針葉樹2分類群（マツ属複維管束亜属・スギ）と広葉樹1分類群（クリ）に同定された。

以下に、各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・マツ属複維管束亜属 (*Pinus* subgen. *Diploxylon*) マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直树脂道で構成される。仮道管の早材部から晚材部への移行は急～やや緩やかで、晚材部の幅は広い。垂直树脂道は晚材部に認められる。放射組織は、仮道管、柔細胞、水平树脂道、エビセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には瘤状の突起が認められる。放射組織は単列、1～10細胞高。

・スギ (*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don) スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晚材部への移行はやや急で、晚材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晚材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2～4個。放射組織は単列、1～10細胞高。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圈部は3～4列、孔圈外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は单穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。

4. 考 察

堀跡の土留め杭材は、いずれも芯持丸木材であり、径が5～6cmの試料と9～11cmの試料とに分けられ

る。この他に、樹種同定対象とされた杭材も、何れも芯持丸木が利用され、径が4~5.5 cmと8.5~11.5 cmと今回分析対象とされた杭材とほぼ同様のサイズに区別される。

これらの杭材には、針葉樹のスギとマツ属複維管束亞属、落葉広葉樹のクリが確認された。このことから、土留めの杭材は複数の分類群により構成されていたと考えられる。マツ属複維管束亞属やクリは、強度・保存性が高いことから、土木材として適材と言える。スギも比較的耐水性があることから、土木材として利用されたと考えられる。

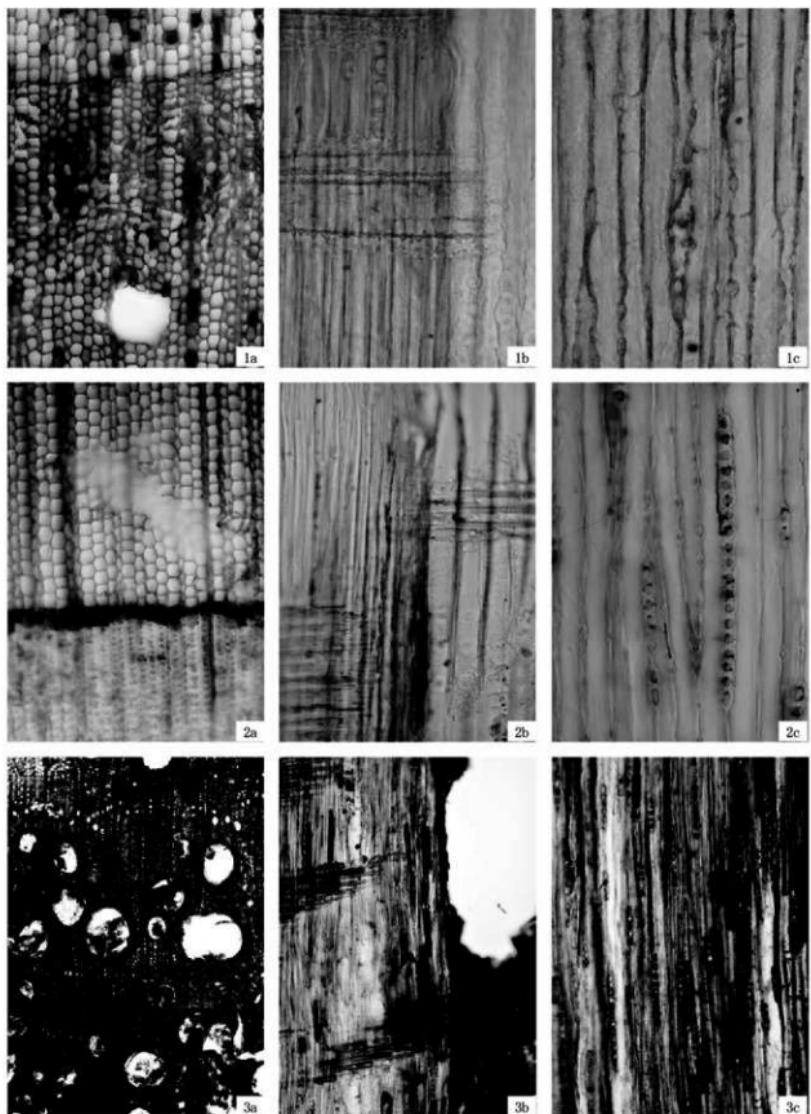
また、杭材の径と樹種をみると、径9~11 cmの試料（No.1, 3）はいずれもスギであったのに対し、径5~6 cmの試料（No.2, 4, 5）ではマツ属複維管束亞属とクリが確認された。また、この他の資料についても、径8.5~11 cmの杭材は全てスギであるのに対し、径4~5.5 cmの杭在にはマツ属複維管束亞属とクリが確認されており（未公表資料）、杭材の径によって樹種が異なるという傾向が示唆される。現段階では、杭材の径と樹種に関する調査事例が少ないため、今後は資料の蓄積とともに杭材の配置（配列）状況などの発掘調査結果を含めた検討が望まれる。

引用文献

- 伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 I. 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.
- 伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 II. 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.
- 伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 III. 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.
- 伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 IV. 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.
- 伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 V. 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.
- 林 昭三, 1991, 日本産木材 顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
- Richter H.G., Grosser D., Heinz L. and Gasson P.E. (編), 2006, 針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特 リスト, 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修), 海青社, 70p. [Richter H.G., Grosser D., Heinz L. and Gasson P.E. (2004) *IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification*].
- 島地 謙・伊東隆夫, 1982, 国税木材組織, 地球社, 176p.
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト, 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*].

通し No.	器種	木取り	直径 (cm)	樹種	備考
No.1	杭	芯持丸木	11	スギ	
No.2	杭	芯持丸木	6	マツ属複維管束亞属	3方向から先端加工
No.3	杭	芯持丸木	9	スギ	
No.4	杭	芯持丸木	5	クリ	
No.5	杭	芯持丸木	5	クリ	

第6表 樹種同定結果



1. マツ属複雜管束亜属 (No.2)

2. スギ (No.1)

3. クリ (No.5)

a:木口, b:柾目, c:板目

300 μ m:3a

200 μ m:1-2a, 3b, c

100 μ m:1-2b, c

第7章 総括

今回の調査地は、標高は平均 21.500m（現地表面より 1.0m 下）で遺構面が確認された。全面的に近現代の削平を受け、遺構の遺存状況は不良ながら、堀・廃棄土壙・井戸等城内空間復元の資料となる遺構が確認された。以下、「正保城絵図」（国立公文書館蔵；以下絵図）から調査区の空間復元を試みる。

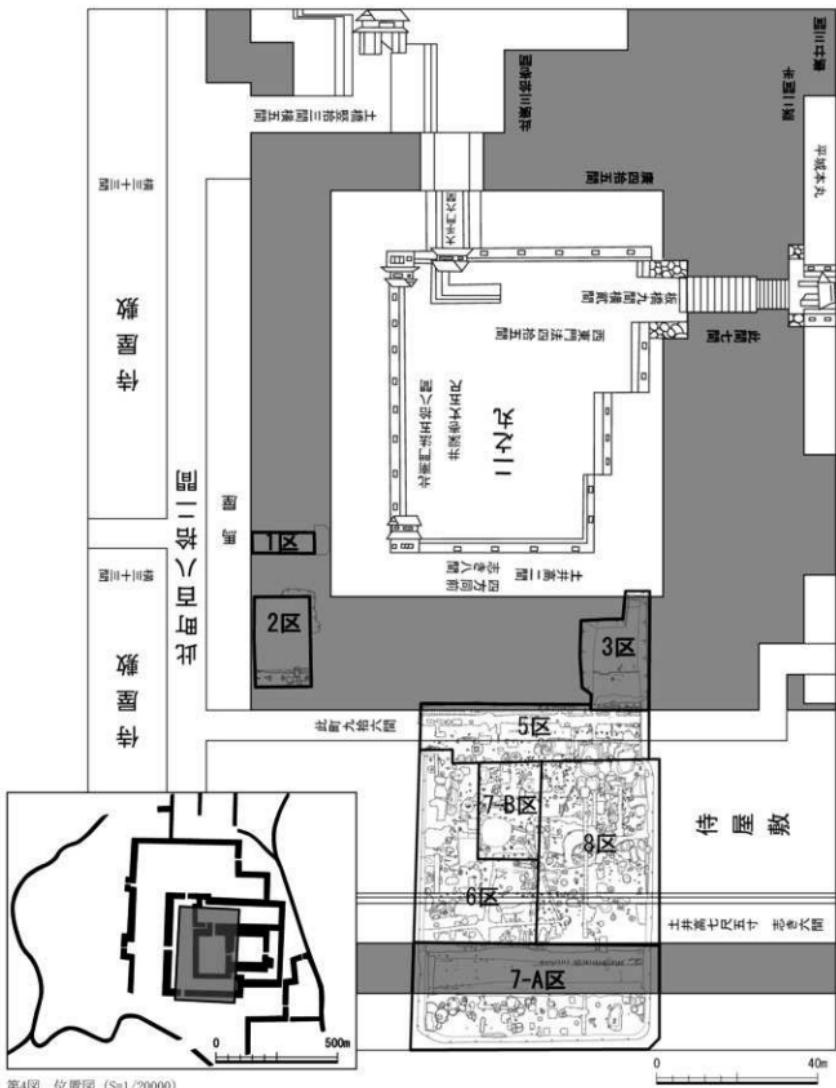
1・2・3区から検出された二ノ丸南側の内堀は、絵図によると堀幅は「廣二十間」(36.0m)と記載されている。堀両岸が確認された3区での堀幅は約 27.0m を測る。1区の調査では南北にはしる堀の東側肩を断面で確認した。1区と3区の調査から内堀の東西方向と南北方向が確定できたが、調査区外の為確認できなかつた。堀の交点となる2区北西付近が屈曲部付近と考えられる。7-A区で検出された外堀は、絵図から南・北側の武家屋敷を区画する。絵図によると「廣八間」(14.4m)と記載されているが、調査で確認された堀幅は約 11.0m であった。内堀・外堀共に絵図に記載の幅（廣）と調査で得られた堀幅が一致しないが、この差の理由については今後の検討課題といえよう。

外面に面する側の土居（「土井」）は絵図によると「高七尺五寸」(21.5m)、「志き（基底部幅）六間」(10.8m)と記載されるが、調査では近代の削平で確認されなかつた。しかし、7-A区から検出された外堀肩から北 9～10m 幅の帯状区域は極めて遺構密度が希薄である。この幅が絵図の「志き」と一致することからこの範囲が土塁の基底部の可能性が高い。なお、絵図のとおり石垣は確認されなかつた。素掘りの壁面を守るために考えられる堀底の両端に杭を交互に組み合わせ土留め杭設備を設けていたことが調査で確認されたが、「雪中勢揃之図」（蒼柴神社所蔵）等でも水面に並ぶ杭列が描かれている。

5区は絵図から内堀端を通る東西道路と考えられる。絵図に幅員の記載はない。調査では明確な道路関連の遺構は確認されなかつたが、土居同様道路と考えられる部分では遺構が僅かに確認されたのみにとどまること、これに平行し、屋敷地境に解と思われる柱穴列が確認されたことから道路幅員は 5.0m 前後と推定される。なお、市道 1 号線は嵩上げされつつも江戸時代以来、道路の位置は大きく変わらないことがわかつた。

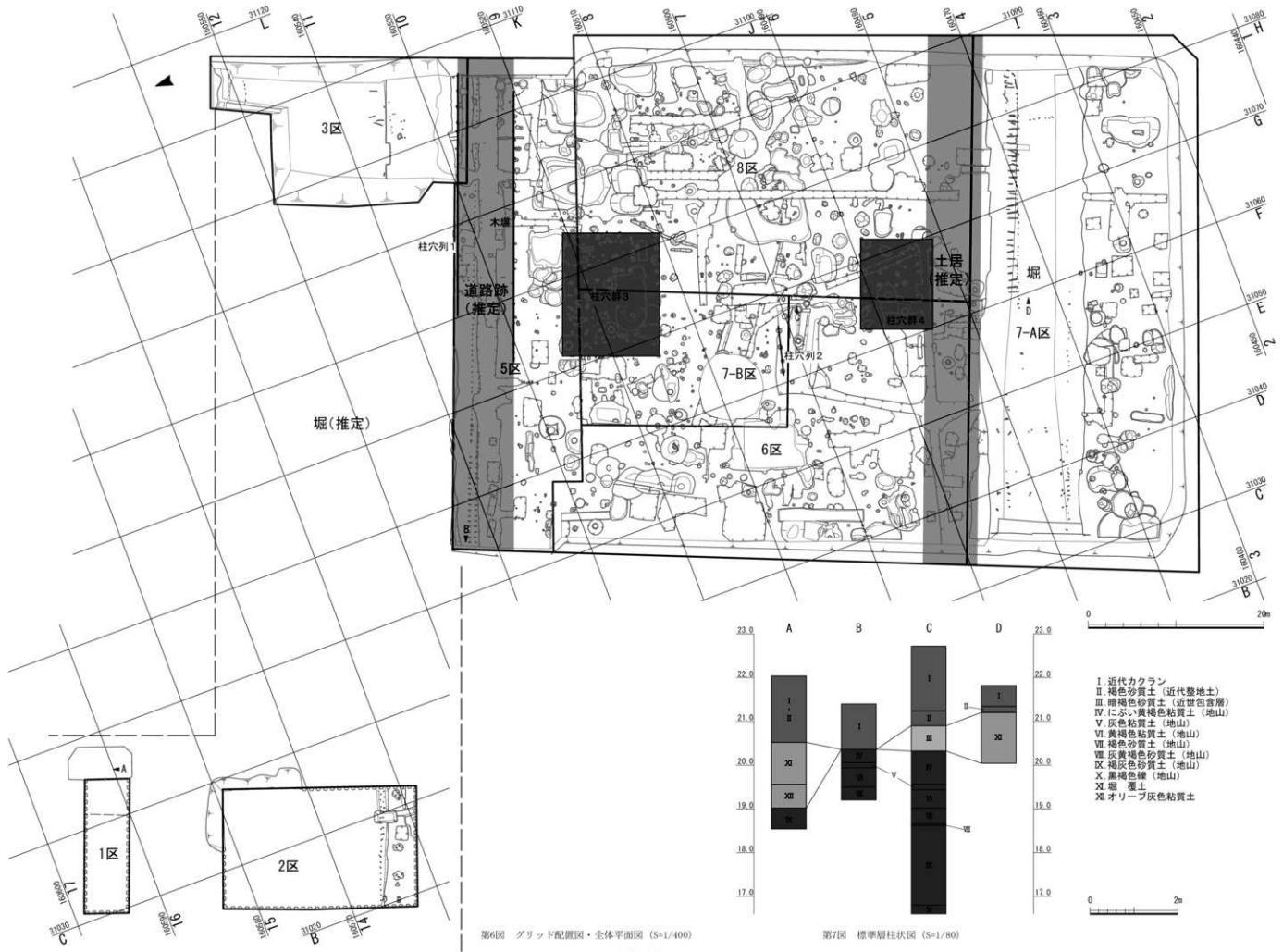
内・外堀間は絵図では「侍屋敷地」とされ、南北幅について「横貳拾五間」(45.0m)と記載される。調査では8区の西側及び7-B区の区域で遺構密度が高かつた。東西道路に沿う調査区西側の6区に井戸が集中する。また、東側には、覆土内に木片等の有機質を含む土壤が多いことから廃棄土壙（ゴミ穴）であった可能性が高い。以上から屋敷地北側が台所等勝手側と考えられる。また、井戸・土壤間にみられる柱穴群は、勝手に付随する納屋のような小屋と考えられる。南側土居までの遺構が少ない部分に礎石の母屋があつたと推定される。なお、ゴミ穴の覆土内から漆碗や曲物が出土したもの、箸や灯明皿といった一部の生活雑器が極めて少ないと、城下の土器組成や屋敷の性格等と合わせ今後の検討課題となろう。

以上、調査成果は大筋で絵図記載内容と合致することがわかつた。ただし堀幅等の調査成果と相違するものは今後の検討課題であろう。以上から今後の発掘調査では絵図を有効に使用しながら、発掘調査から得られる資料を総密に検討しつつ、長岡城の空間復元を行なっていくべきであろう。(北野)



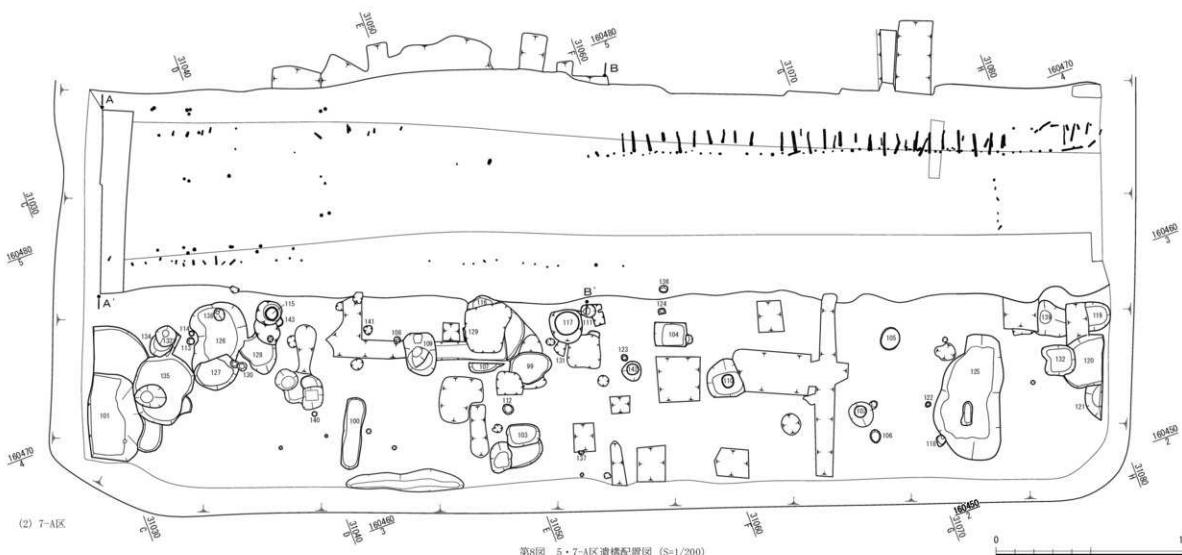
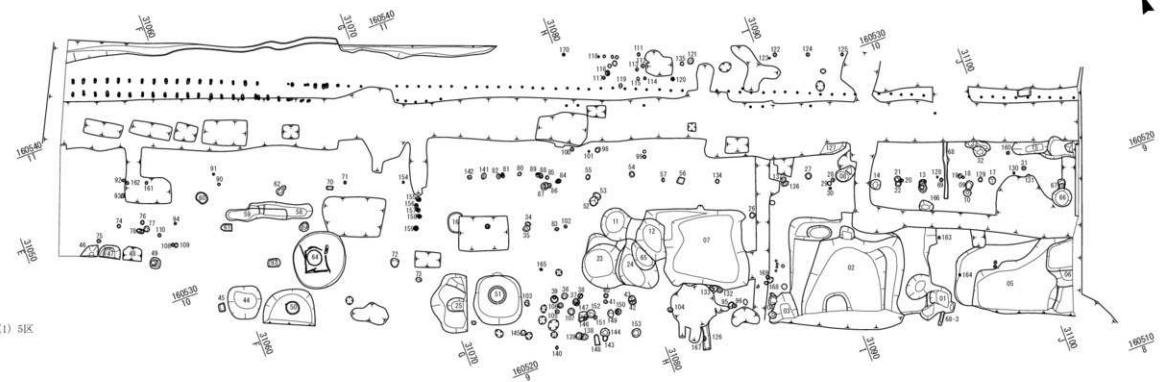
参考文献

- 岩本正二 2001 『中世北陸の井戸』 「中世の井戸」 北陸中世考古学研究会
- 大橋康二他 2000 『九州陶磁の編年』 九州近世陶磁学会
- 小川幹太他 2006 『富山城跡発掘調査報告書』 富山市教育委員会
- 河村健史他 2004 『福井城跡-4号線-』 福井県教育厅埋蔵文化財調査センター
- 駒形敏朗 1997 『長岡城跡発掘調査報告書-大手通り地下駐車場建設-』 長岡市教育委員会
- 長岡市 1992 『長岡市史 資料編1 考古』 長岡市
- 長谷川勉他 1999 『長岡藩政史料集(5) 御藏と御藏役所』 市史双書 №8 長岡市立中央図書館文書資料室
- 藤沢良祐他 2006 『江戸時代のやきもの-生産と流通-』 財団法人瀬戸市文化振興財团
- 本山幸一他 2002 『長岡藩政史料集(6) 長岡藩の家臣団』 市史双書 №1 長岡市立中央図書館文書資料室
- 築取三義 1975 『長岡城物語』 株式会社 国書刊行会

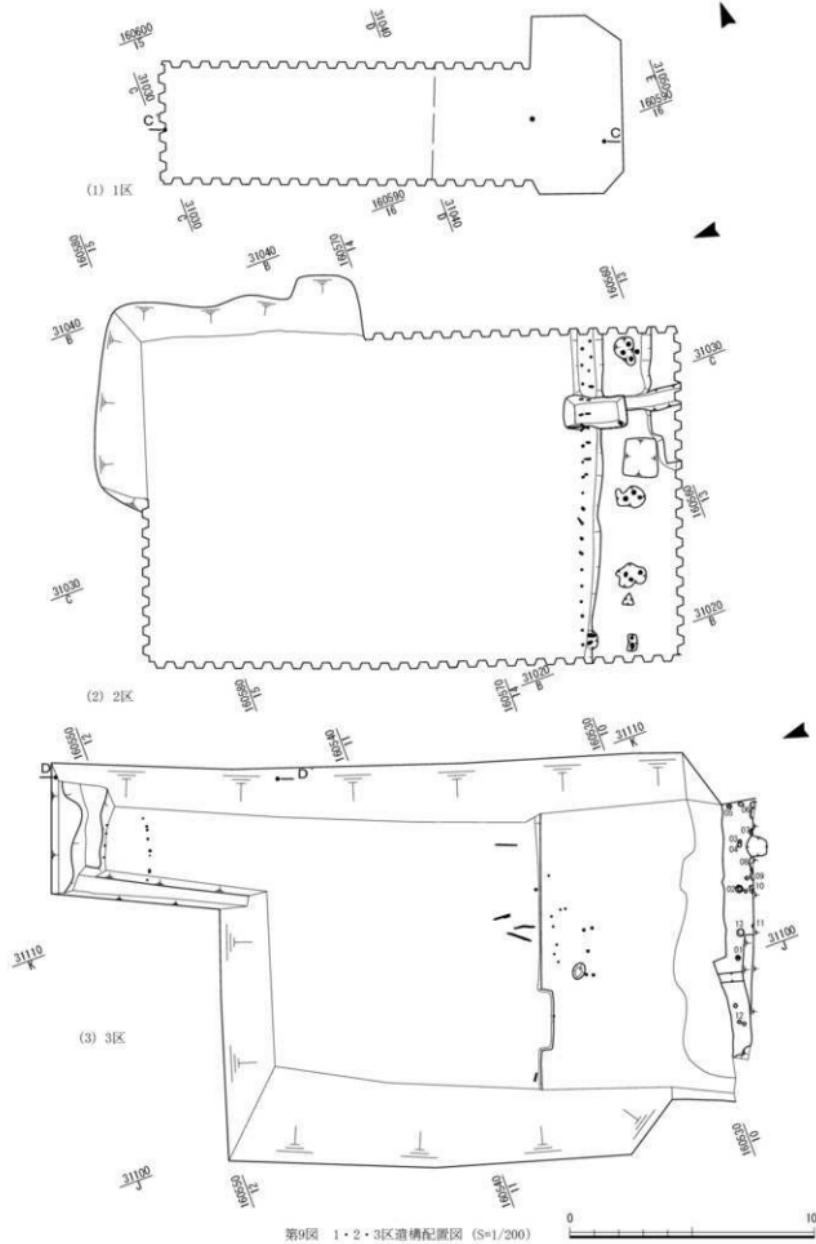


第6図 グリッド配置図・全体平面図 (S=1/400)

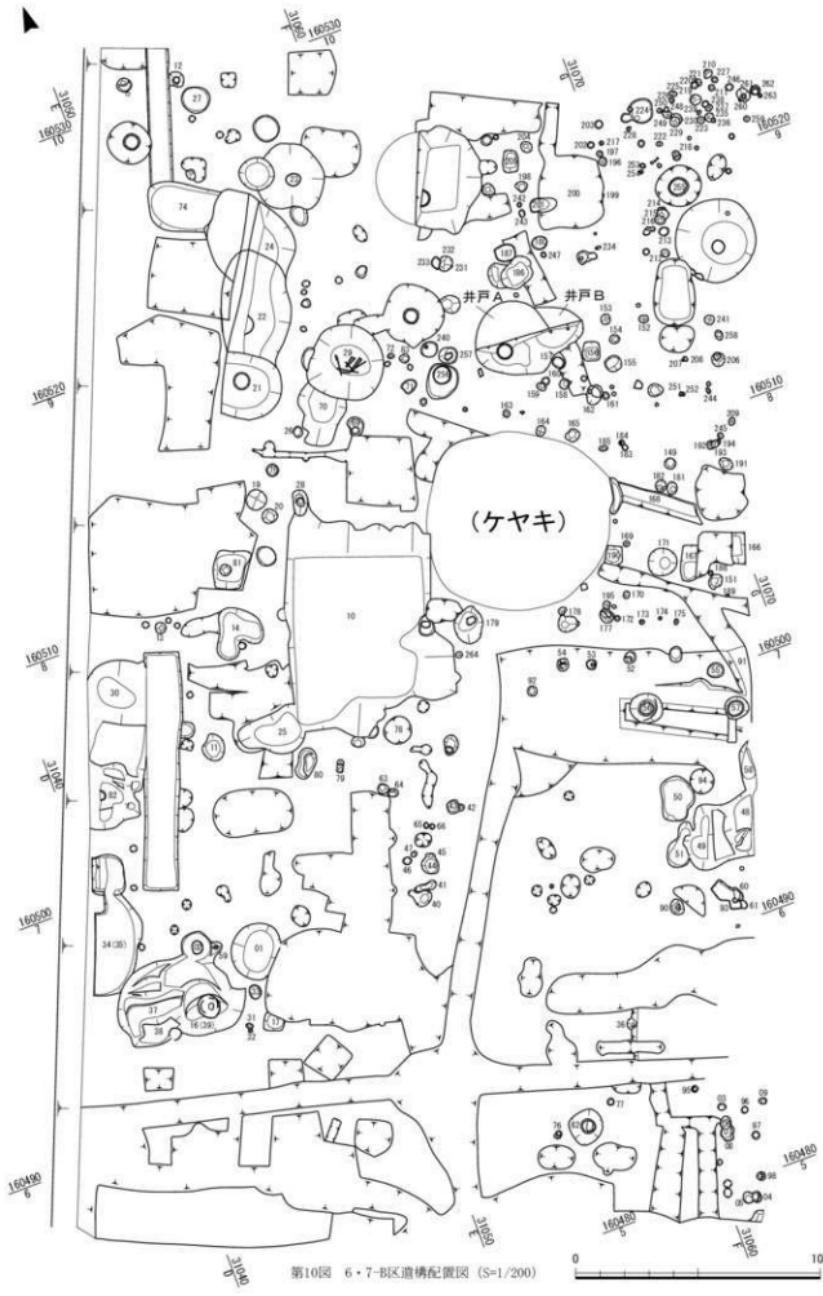
第7図 標準層柱状図 (S=1/80)



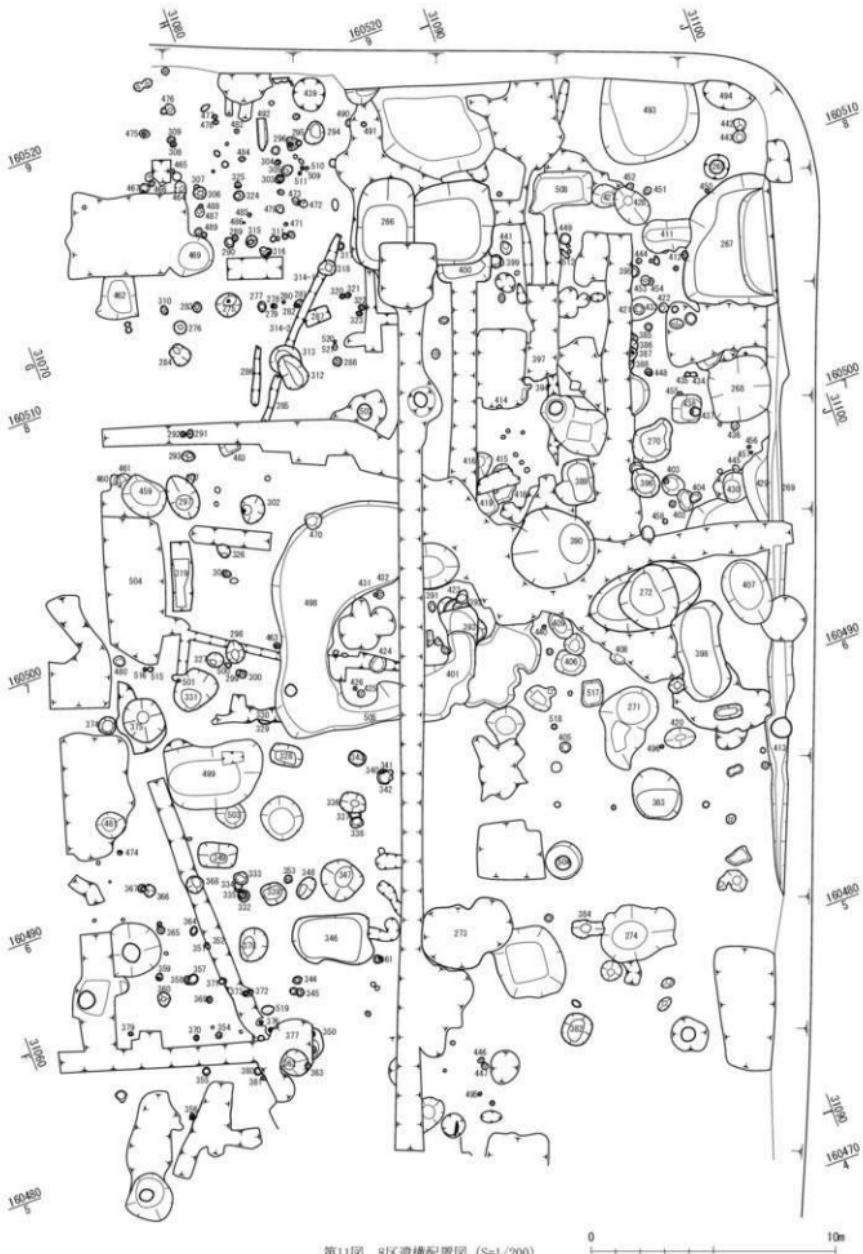
第8図 5・7-A区造構配置図 (S=1/200)



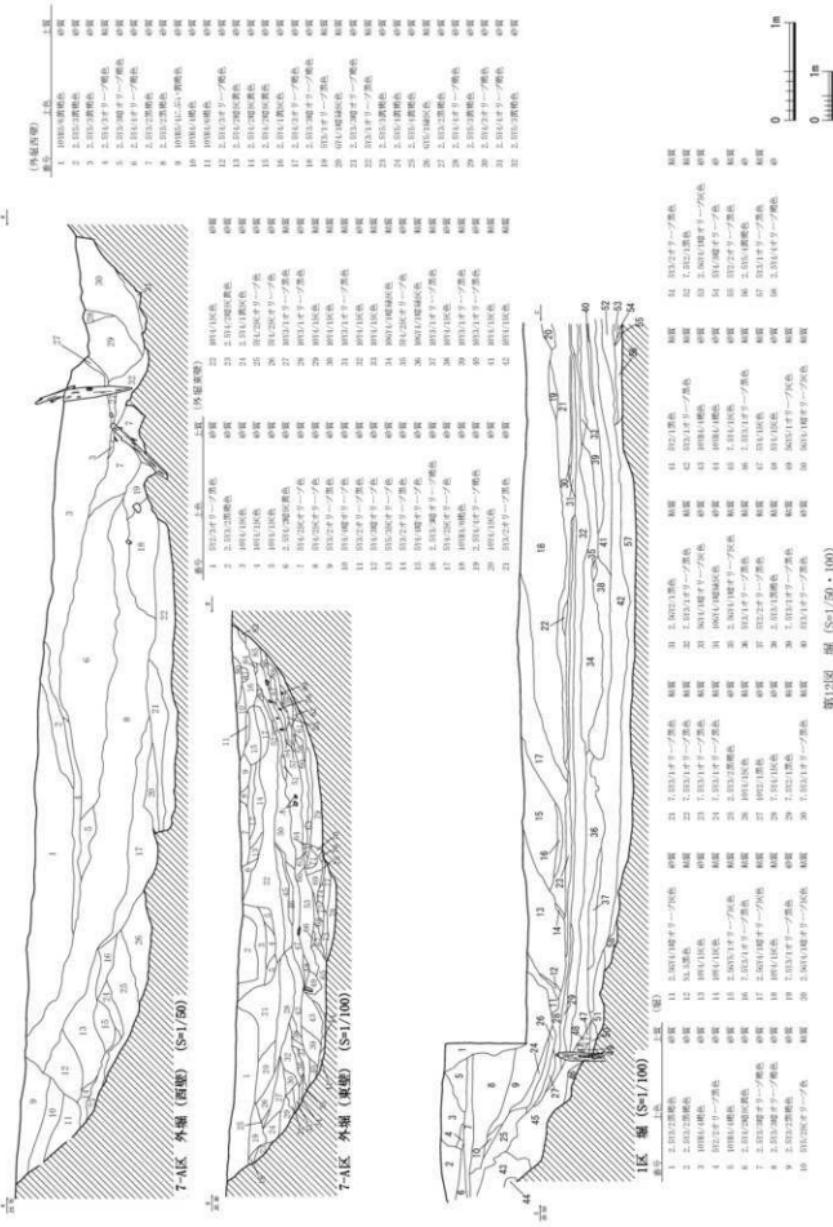
第9図 1・2・3区造構配図 (S=1/200)



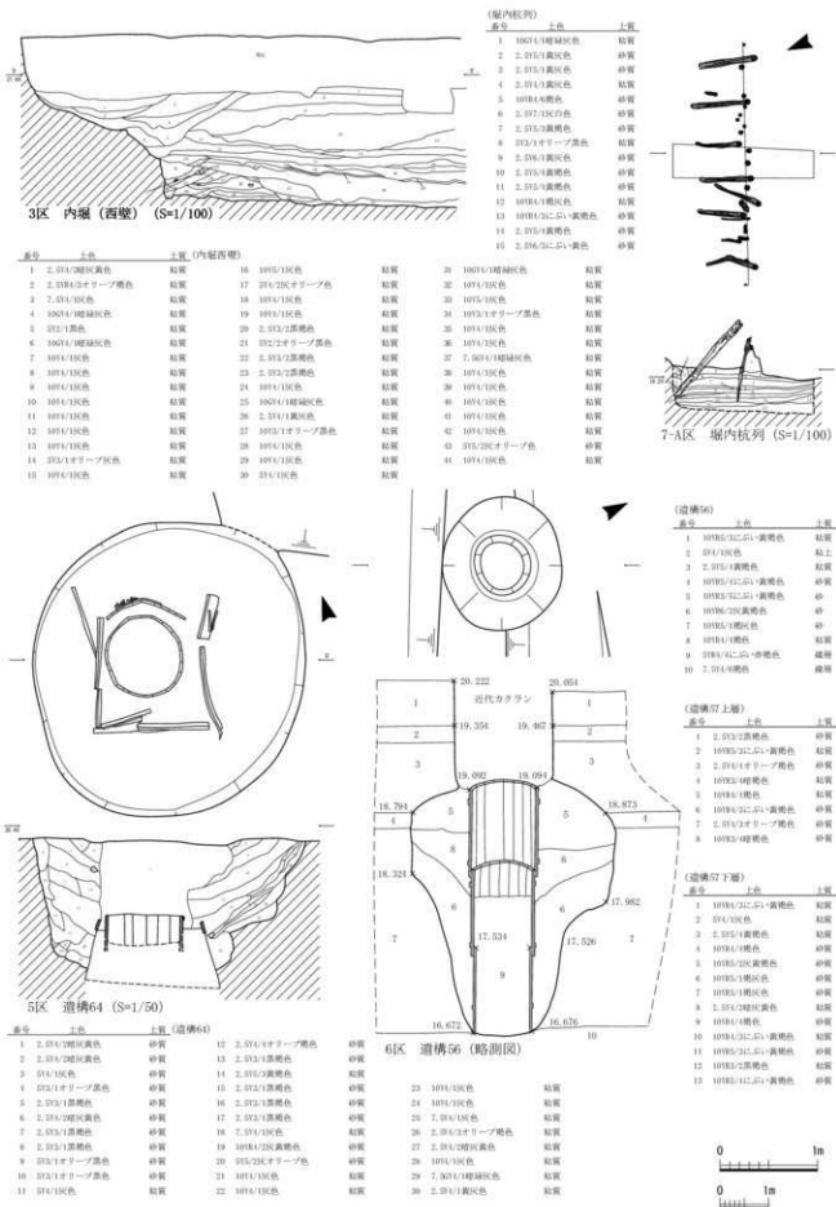
第10図 6・7-B区道構配図 (S=1/200)



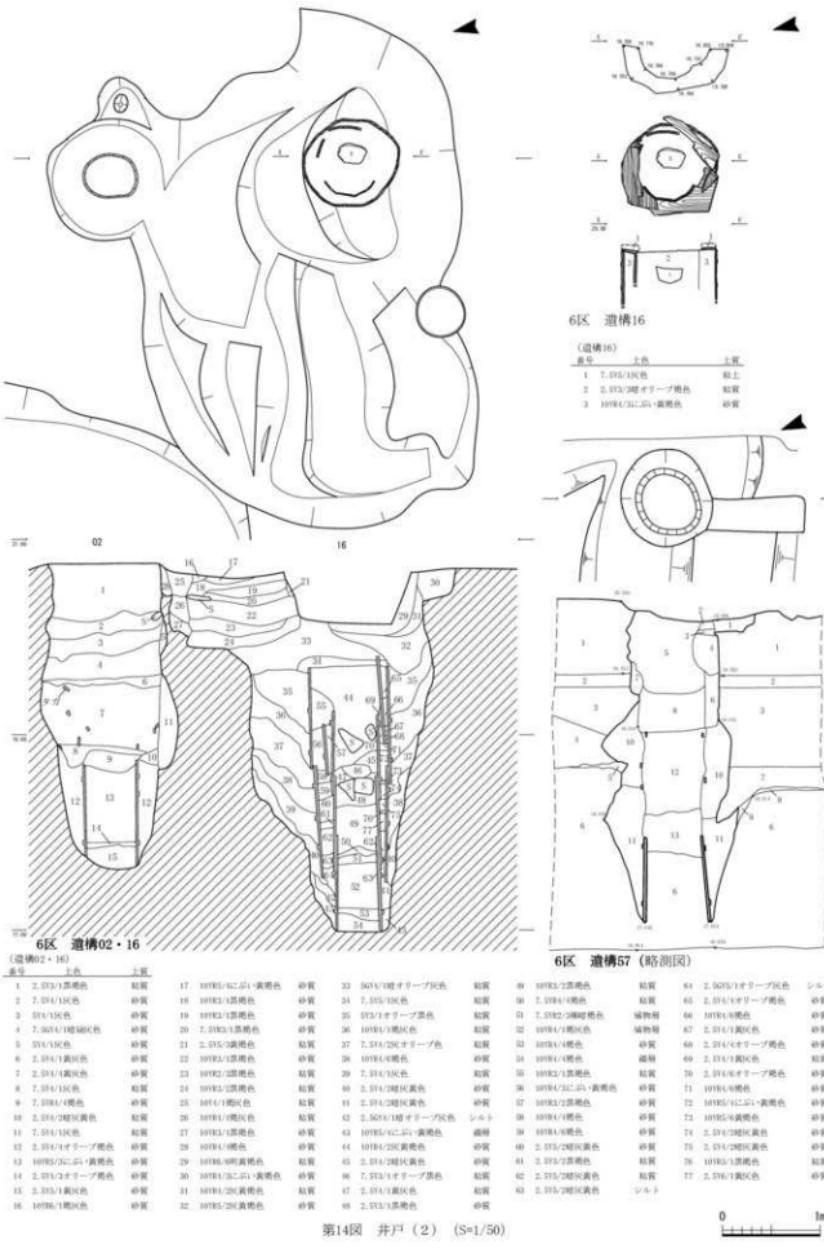
第111図 8区構造配置図 (S=1/200)



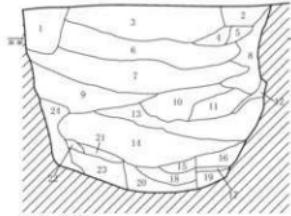
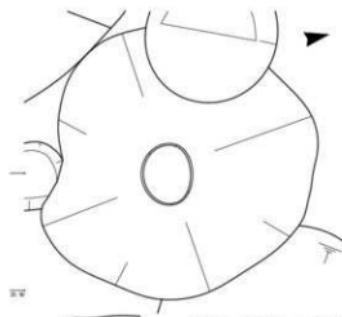
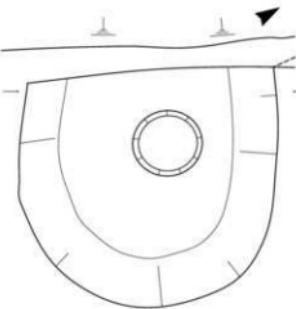
20



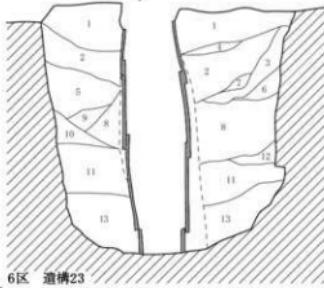
第13図 井戸（1）・堀 (S=1/50・1/100)



第14図 戸井 (2) (S=1/50)



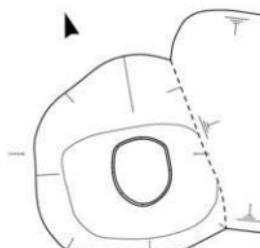
6区 遺構21



6区 遺構23



8区 遺構498



6区 遺構110

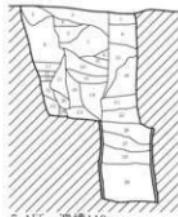
番号	土色	上質	(遺構698)
1	10個/3に△-1黄褐色	砂質	2. 2. 3V4/2暗灰黄色
2	2. 3V4/3黄褐色	砂質	21. 10V4/1灰灰色
3	10V4/4褐色	砂質	22. 2. 3V4/2暗褐色
4	10V4/3に△-1黄褐色	砂質	23. 2. 3V4/1灰灰色
5	2. 3V4/2暗灰黄色	砂質	24. 2. 3V4/2アリーバー褐色
6	2. 3V4/2暗灰黄色	粘質	25. 2. 3V4/1灰灰色
7	2. 3V4/2黒褐色	粘質	26. 2. 3V4/2暗灰黄色
8	2. 3V4/1黑褐色	粘質	27. 2. 3V4/2アリーバー褐色
9	2. 3V4/1黄褐色	粘質	28. 2. 3V4/2暗灰黄色
10	10V4/4褐色	砂質	29. 2. 3V4/2暗灰黄色
11	2. 3V4/4黄褐色	砂質	30. 2. 3V4/1灰灰色
12	2. 3V4/4黄褐色	砂質	31. 2. 3V4/2アリーバー褐色
13	10V4/1暗灰黄色	砂質	32. 2. 3V4/2暗灰黄色
14	2. 3V4/1黄褐色	砂質	33. 2. 3V4/2暗灰黄色
15	2. 3V4/2黒褐色	砂質	34. 2. 3V4/2暗褐色
16	2. 3V4/3オリーブ色	砂質	35. 2. 3V4/2暗灰黄色
17	2. 3V4/3黄褐色	砂質	36. 2. 3V4/1灰灰色
18	2. 3V4/1黄褐色	砂質	37. 2. 3V4/1アリーバー黑色
19	2. 3V4/2黒褐色	砂質	38. 2. 3V4/2暗灰黄色

第15図 井戸 (3) (S=1/50)

(遺構1)		
番号	土色	上質
1	2. 3V3/2黒褐色	砂質
2	2. 3V3/2黒褐色	砂質
3	2. 3V3/2黒褐色	砂質
4	2. 3V3/2黒褐色	砂質
5	3V3/2アリーバー色	粘質
6	2. 3V3/2黒褐色	砂質
7	2. 3V3/2黒褐色	砂質
8	3V3/2アリーバー色	砂質
9	2. 3V3/2黒褐色	砂質
10	2. 3V3/2黒褐色	砂質
11	3V4/10C色	粘質
12	2. 3V3/2黒褐色	砂質
13	2. 3V3/2黒褐色	砂質
14	2. 3V3/2黒褐色	砂質
15	2. 3V3/2黒褐色	砂質
16	2. 3V3/2黒褐色	砂質
17	3V5/2Kオリーブ色	砂質
18	3V5/2Kオリーブ色	砂質
19	2. 3V3/2黒褐色	砂質
20	3V5/2Kオリーブ色	砂質
21	2. 3V3/2アリーバー色	砂質
22	3V5/2Kオリーブ色	砂質
23	2. 3V3/2黒褐色	砂質
24	3V5/2Kオリーブ色	砂質

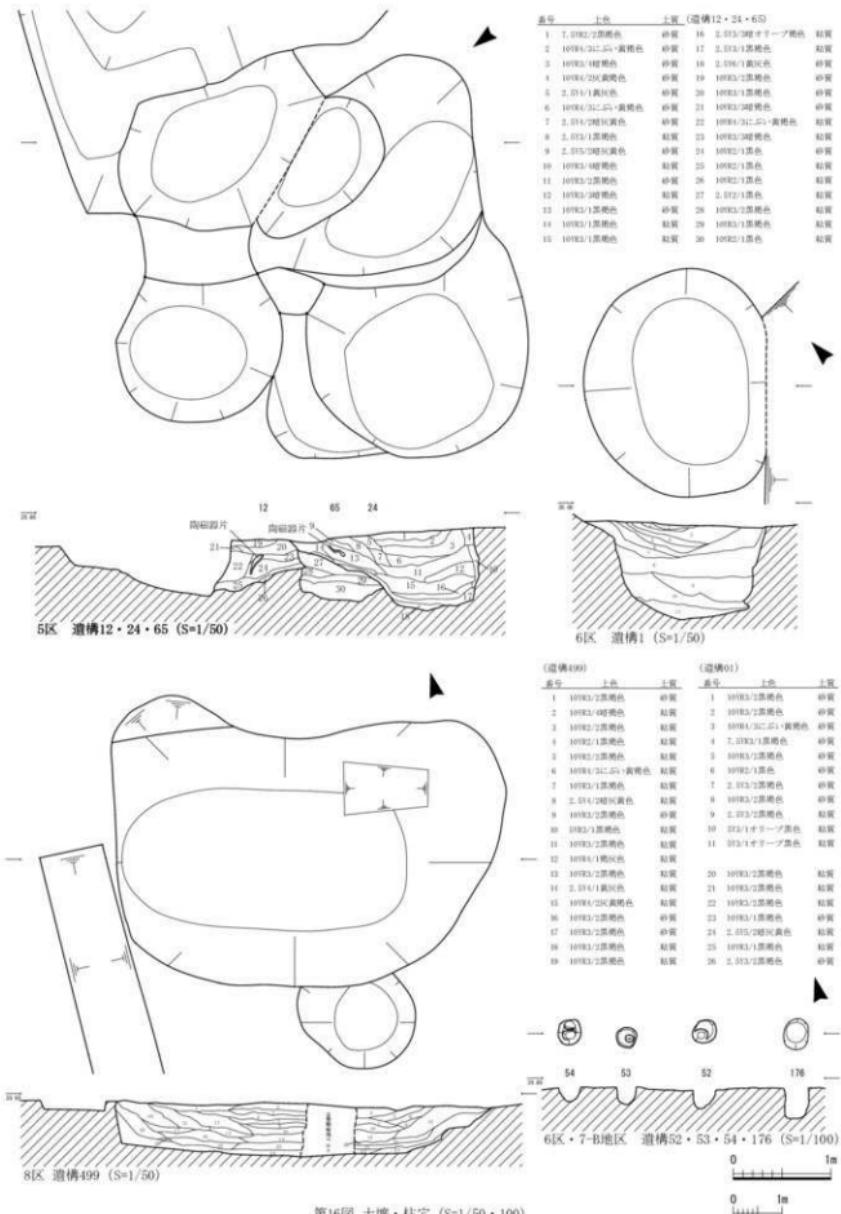
(遺構23)		
番号	土色	上質
1	10V4/1褐色	砂質
2	10V4/1褐色	砂質
3	2. 3V5/2暗灰黄色	砂質
4	3V5/2Kアリーバー色	砂質
5	2. 3V5/2アリーバー色	砂質
6	10V4/1褐色	砂質
7	2. 3V5/2暗灰黄色	砂質
8	2. 3V5/2暗灰黄色	粘質
9	2. 3V5/2黒褐色	砂質
10	10V4/3C-△-1黄褐色	砂質
11	3V5/2K色	砂質
12	3V5/2K色	砂質
13	3V5/2K色	砂質

(遺構110)		
番号	土色	上質
1	10V2/2黒褐色	粘質
2	10V2/2黒褐色	粘質
3	10V2/2黒褐色	粘質
4	10V4/2褐色	粘質
5	10V4/2褐色	砂質
6	10V2/2黒褐色	粘質
7	7. 5V2/3暗褐色	砂質
8	2. 5V2/2黒褐色	砂質
9	10V2/2暗灰黄色	砂質
10	10V4/2K黃褐色	砂質
11	10V4/2K-△-1黄褐色	粘質
12	7. 5V2/2K褐色	粘質
13	10V4/2-△-1黄褐色	粘質
14	10V4/4褐色	砂質
15	5V2/1黒褐色	砂質
16	7. 5V2/2暗褐色	粘質
17	10V4/3-△-1黄褐色	粘質
18	10V4/2褐色	粘質
19	10V4/2K黃褐色	粘質
20	10V4/2K黃褐色	粘質
21	2. 5V2/2黒褐色	砂質
22	2. 5V2/2暗灰黄色	粘質
23	10V4/2暗灰黄色	砂質
24	2. 5V2/2暗灰黄色	粘質
25	5V2/2黒褐色	砂質
26	10V2/2黒褐色	砂質
27	2. 5V2/2黒褐色	粘質
28	2. 5V2/2黒褐色	粘質
29	10V2/2黒褐色	粘質
30	10V2/2暗灰黄色	粘質
31	10V2/2-△-1黄褐色	粘質

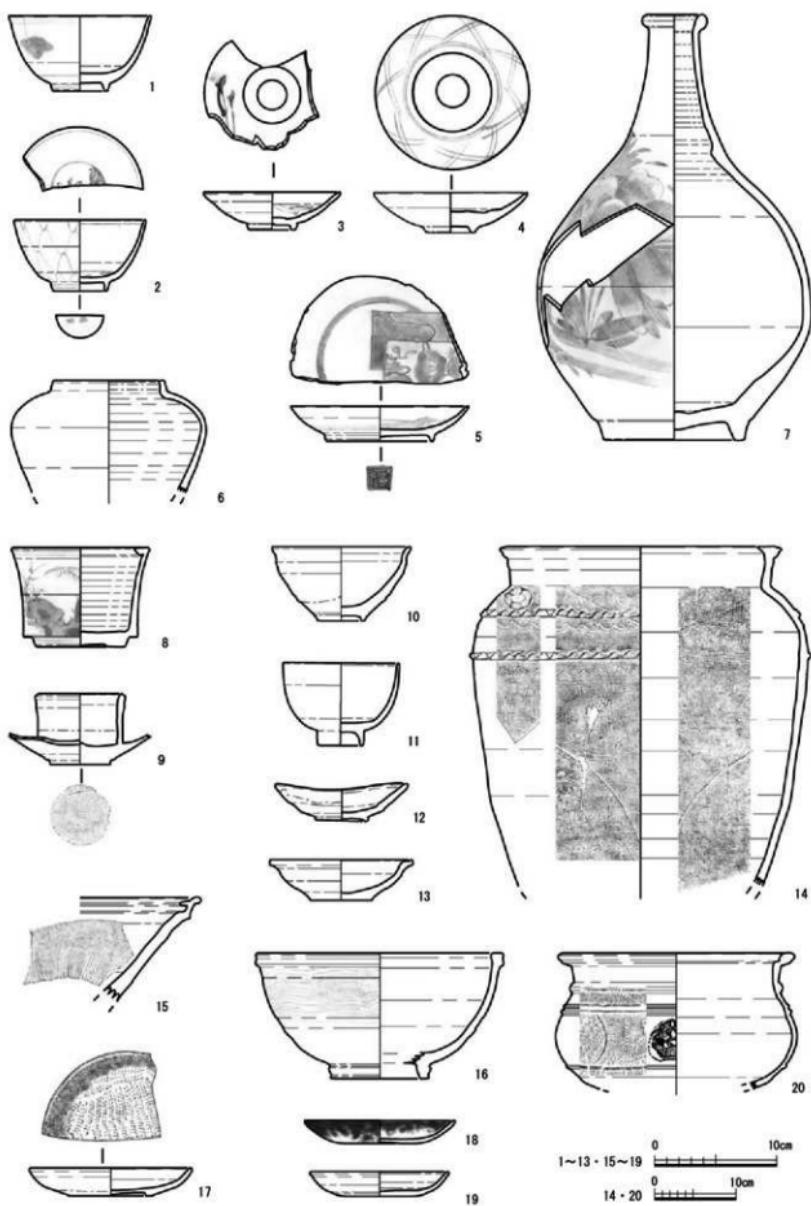


7-A区 遺構110

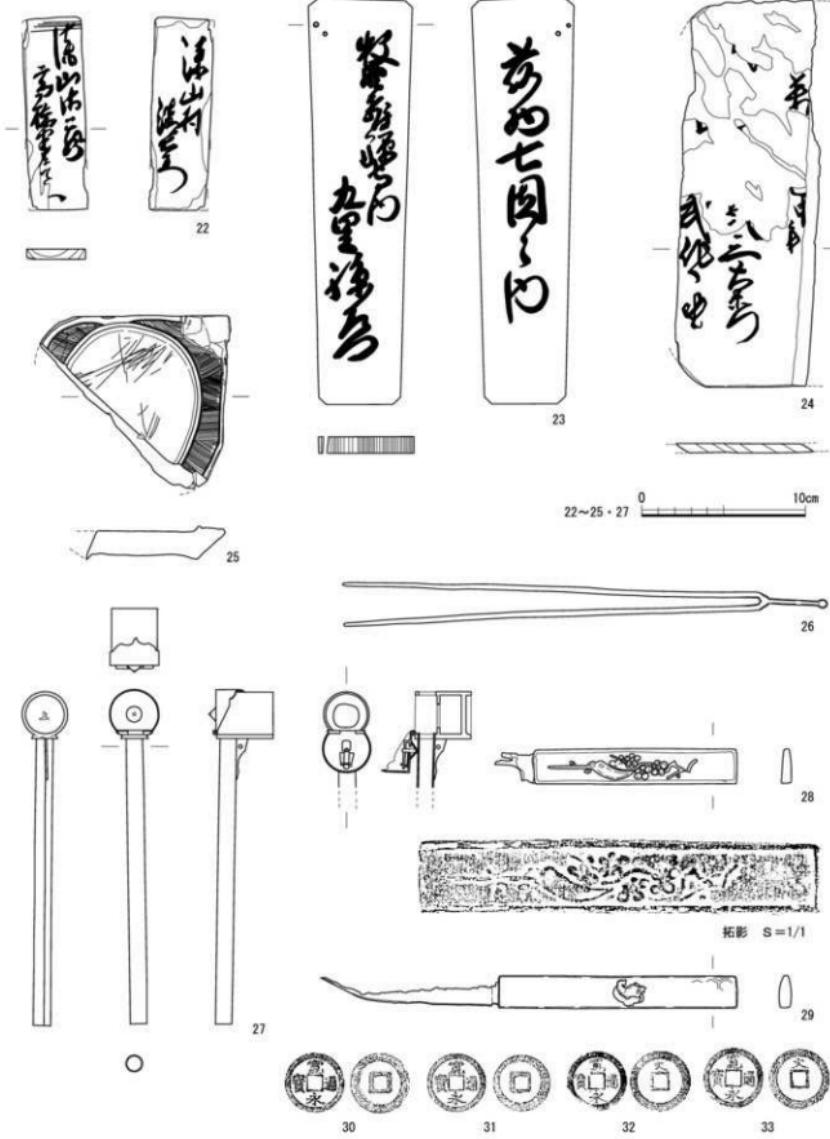
0 1m



第16図 土壌・柱穴 (S=1/50・100)



第17図 陶器 (S=1/4・1/6)



第18図 木製品・石製品・金属製品 (S=1/2 * 1/3)

0 5cm
26・28~33



1・2区(真上から)

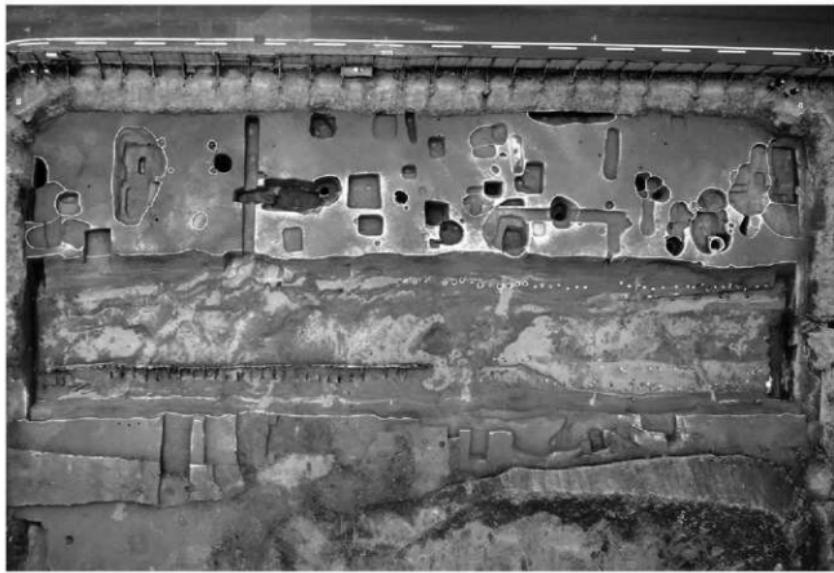


3・5区(真上から)

写真1 遺跡・遺構

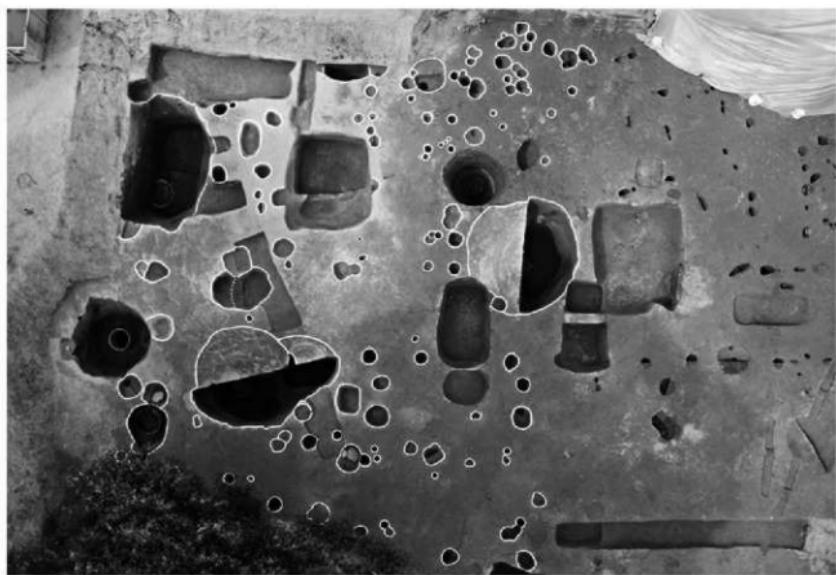


6区(真上から)



7-A区(真上から)

写真2 道路・道橋



7-B区(真上から)



8区(真上から)

写真3 遺跡・遺構



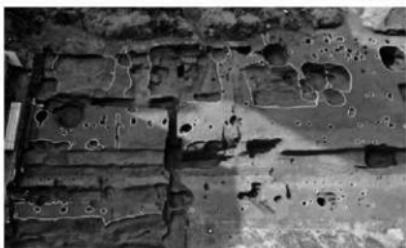
2区 堀 桁列検出状況(北西から)



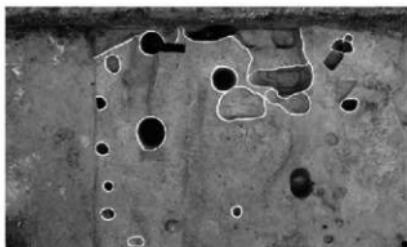
7-A区 堀 桁列検出状況(北西から)



7-A区 堀(西から)



5区 木堀・柵列検出状況(北から)



6区 柱穴群検出状況(真上から)



8区 柱穴群検出状況(真上から)



6区 道構1(南から)



6区 道構29(北東から)

写真4 道跡・道構

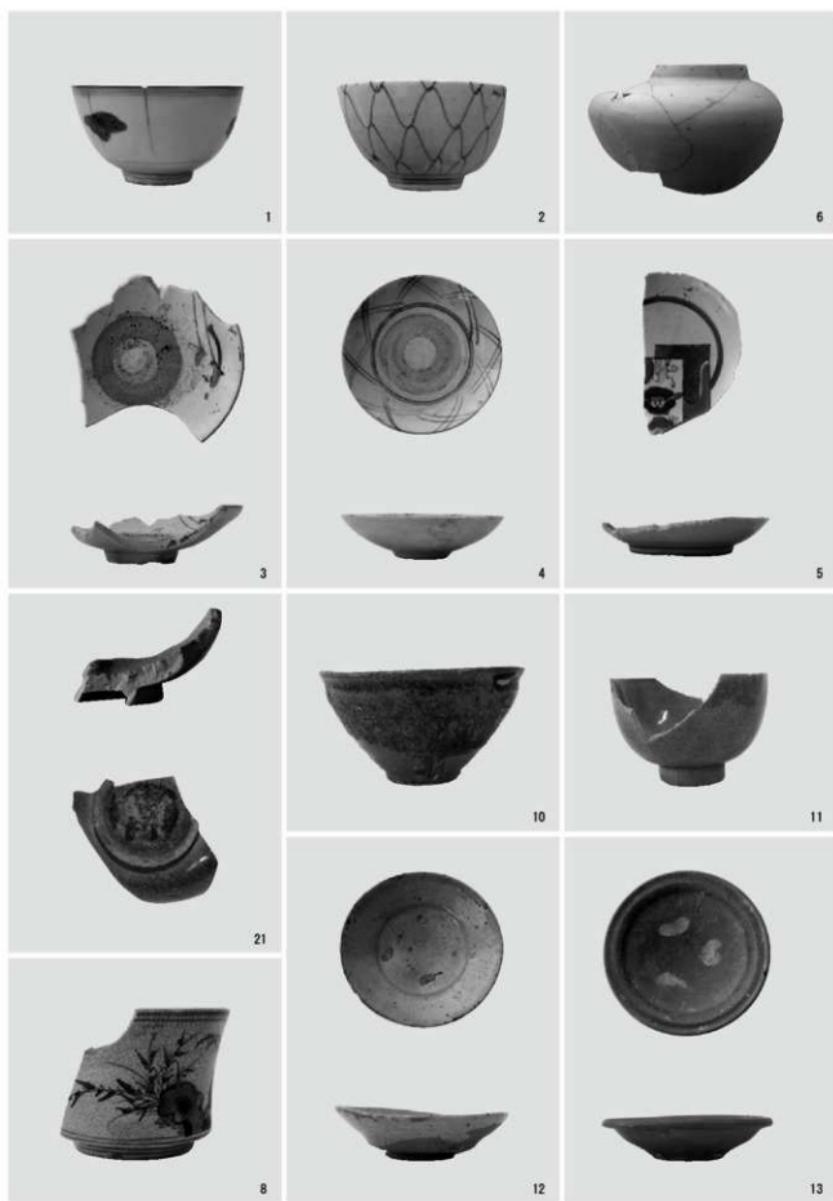


写真5 陶磁器

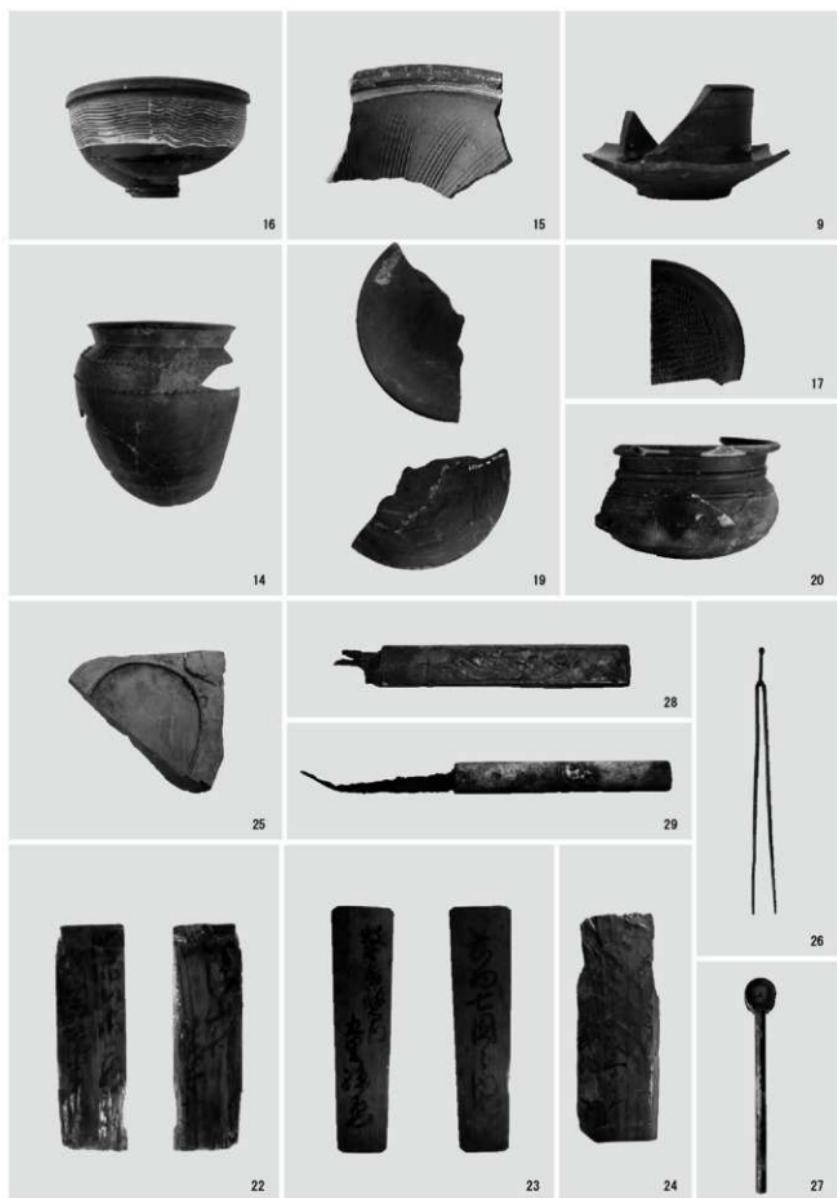


写真6 陶磁器・木製品・石製品・金属製品

報告書抄録

ふりがな	ながおかじょうあと (こうせいいかいかんちく)						
書名	長岡城跡 (厚生会館地区)						
副書名	シティホール (仮称) 建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
編著者名	鳥居美栄 佐藤優子 北野 薫						
編集機関	長岡市教育委員会 株式会社 太陽測地社						
所在地	(長岡市役所) 新潟県長岡市幸町2丁目1番1号 (本社) 石川県石川郡野々市町中林1丁目301番地						
発行年月日	平成22年(2010)2月26日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡 番号	北緯	東経	調査期間	調査面積
長岡城跡	新潟県長岡市 大手通1丁目 ほか地内	15202	146	37度 25分 16秒	138度 50分 31秒	平成21年 1月19日 ～ 平成21年 10月16日	約5,836m ²
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
城跡 (武家屋敷)	近世	堀 土留め杭列 礎石建物 掘立柱建物 井戸 土坑	肥前産陶磁器 瀬戸・美濃産陶磁器 信楽産陶器 木製品(木簡・漆塗椀) 石製品(硯・引手鉢型) 金属製品(簪・矢立・小柄)	井戸桶内より小柄が出土 外堀の底より矢立が出土 ゴミ穴より木簡が出土			

長岡城跡 (厚生会館地区)

—シティホール(仮称)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

印 刷 平成22(2010)年2月26日

発 行 平成22(2010)年2月26日

編集機関 長岡市教育委員会・株式会社 太陽測地社

発 行 長岡市教育委員会

新潟県長岡市幸町2丁目1番1号

印 刷 株式会社 サンワプロセス

新潟県長岡市美沢3丁目234番地5号

